

# 日本におけるキリスト教の歩み

## その2 迫害初期から迫害中期

26 聖人殉教翌年 1598 年豊臣秀吉は幼い秀頼を案じ、後継五人の奉行に託し伏見城で歿した。その中心人物の一人が後の将軍徳川家康である

来日したセルケイラ新司教等は、危機急迫の長崎から小西行長の領地志岐に一旦退く。翌年、長崎に移りコレジオの側に住む。

1598 年 8 月セルケイラ新司教とヴァリニャーノ神父長崎へ

戦

国

秀吉の命で朝鮮に出兵していたキリシタン大名たちが九州に戻った。秀吉の死後、引き上げてきたキリシタン大名達は、領内で宣教の結果、信者数が急増した。ところが 1600 年 10 月関ヶ原の戦いで徳川と戦った石田と組んだ小西行長は敗れ、すべての領地を失う。また教会も敵の加藤清正に占拠された。小西行長は、家族も全て失った。これらは、勝利した徳川家康が見せたキリシタンに対する態度の変化と察した。その証にイエズス会のローマ本部への報告書には、家康の記述の中で、必ず最後に「家康が私たちの信仰を好まない」と記述している。

江戸

1600 年  
関ヶ原の戦い

時代

時

家康の時代の初め、迫害はなかったが、キリスト教壊滅時期を目論んでいた。また大名達には信仰を捨てるように勧告。一方、1601 年セルケイラ司教は、岬の教会を司教座としヴァリニャーノ神父らとともに宣教活動した。同年 9 月、日本で初めて二人の司祭が叙階された。1607 年には、退会した千々石ミゲルを除き、天正遣欧少年使節の三人が司祭に叙階された。ところが肥後・熊本の前主となった加藤清正は、日蓮宗の熱心な信者であり、キリスト教に敵意を抱いていた。そのため肥後において厳しい弾圧・迫害により、大勢のキリシタンが殉教した。また 1605 年長州・山口、萩でも盲目ダミアン、メルキオール熊谷豊前守らは、毛利輝元により迫害、殉教した。このように地方で多くの迫害があったにもかかわらず、江戸時代の初期において教会の発展は続いた。その証に信徒数は、全国で三十万人を超えていた。また長崎は東洋のローマとも呼ばれ、大村、有馬、天草にあってもキリスト教国の雰囲気であったという。

1603 年徳川家康  
征夷大將軍

1603  
~  
1615

代

1  
4  
9  
3  
~  
1  
6  
1  
5

当時の日本の状況を知ってか、フランシスコ会のカストロ神父は、密かに日本に戻っていた。また当時、南蛮貿易を望んだ徳川家康の命か、フィリピン貿易の手伝いをした。それ故か、その後フランシスコ会宣教師達は次々と江戸に入り、江戸から仙台まで宣教活動を開始した。また京都にも再び教会を建てた。1601 年ドミニコ会宣教師は、フィリピンとの貿易の為、薩摩の島津家久から招聘されマニラから渡来した。薩摩の島津は、彼らに教会建設許可。また薩摩にいたドミニコ会宣教師らは、肥前に入り佐賀に教会を建築。京都では、日本で最初の女子修道会を創設。加賀では、高山右近らの影響で金沢や能登でも信者の数が増加した。

ルイス・セルケイラ司教